BURST CITY 8
1994.1.1 No.
For Revolutionary Resistance
250円
A.R.P
ARP
P.O.Box57
Sakyo Kyoto
606, JAPAN
FAX +81/75-781-1253

# タミール・イーラム解放の虎（LTTE）スリランカ政府軍基地を攻略し制圧

## ＬＴＴＥ司令部声明

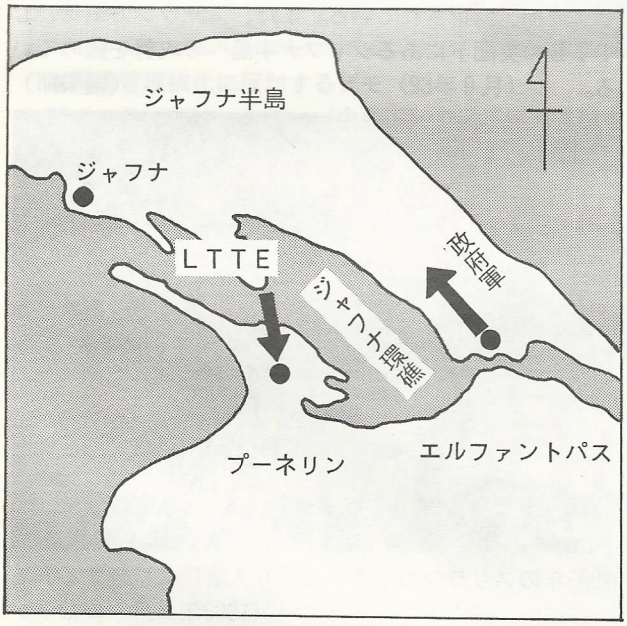
ＬＴＴＥは、プーネリンの軍隊とナバル・コンビナートに対する攻略を強化するため、増援部隊を派遣する。本日（93年11月13日）発表されるＬＴＴＥの声明は、ＬＴＴＥ司令部からのものである。ＬＴＴＥシャルレス・アントニー旅団の攻撃部隊は、プーネリンの戦略軍ならびにナバル・コンビナートを攻撃し、これを木曜の朝（11月11日）ＬＴＴＥの支配下においた。

400名以上のスリランカ軍兵士が殺害されたと思われる。戦闘はすでに掃討作戦の段階となっている。奪取したコンビナートの守りを固めるため、また、敗残兵の撤退のための援軍の到着を妨げるため、多くのＬＴＴＥ戦士が、当地に派遣された。

ＬＴＴＥの戦士が捕獲したものは以下のとおりである。ウォーター・ジェット５、Ｔ－85戦車１両、Ｔ－55戦車１両、５インチ迫撃砲４門、50口径重機関銃11丁、Ｍ－203 ロケット・ランチャー３門、106 ミリ無反動砲１門、軽機関銃50丁、 400丁以上のライフル。

今回の英雄的行動で、 100人を超えるＬＴＴＥ戦士達が殉教を達成した。

ＬＴＴＥのポスター



ＬＴＴＥ反攻作戦地図

〈本号の内容〉

★ドイツ国境警備隊施設への爆破攻撃についての
革命細胞（ＲＺ）声明
★ベルリン・オリンピック誘致に反対し
ベンツ社などを４ヵ所同時爆破
★エルサルバドル、ＦＭＬＮに対するテロ攻撃
《クルディスタン解放闘争特集》
★クルディスタン解放を求めるヨーロッパ一斉蜂起
～トルコ系施設に対し同時多発ゲリラ
★クルド解放諸組織、ロンドン・アピール
★レポート・リジェの大虐殺
★ＰＫＫ非合法化への抗議声明
～在ドイツ、クルド諸組織

Statement of LTTE

# 戦闘をめぐる状況

政府軍は９月30日から、ＬＴＴＥの解放区であるジャフナ半島への大規模な進攻を開始した。ＬＴＴＥとスリランカの事実上の軍事境界線となっているエルファントパスを越えて半島の奥まで侵入している。今回のＬＴＴＥの攻撃は、これに対する大反攻作戦として行われた。

11月11日未明、ＬＴＴＥはスリランカ北部のジャフナ半島と向かい合うプーネリンにあるスリランカ海軍と陸軍の基地への攻撃を開始した。ＬＴＴＥは両基地を占領し、残存する政府軍を包囲して、その掃討に入った。

13日になって、政府軍は海上からの上陸によってＬＴＴＥの包囲網の一部を突破したが、その時点までの政府軍の死者、行方不明者は 500人にのぼっている。14日に政府軍は基地を奪回したが、その損害は1000人にも達した。（ＬＴＴＥ側の損害は、約 400人といわれる）。またＬＴＴＥの声明にもあるように、ＬＴＴＥは撤収に際し多数の軍事物資を捕獲している。

政府軍側は結果として基地を奪回したものの、今回の戦闘が21年にわたる闘いのなかでの最大の敗北であることを自ら認めている。（編集部）

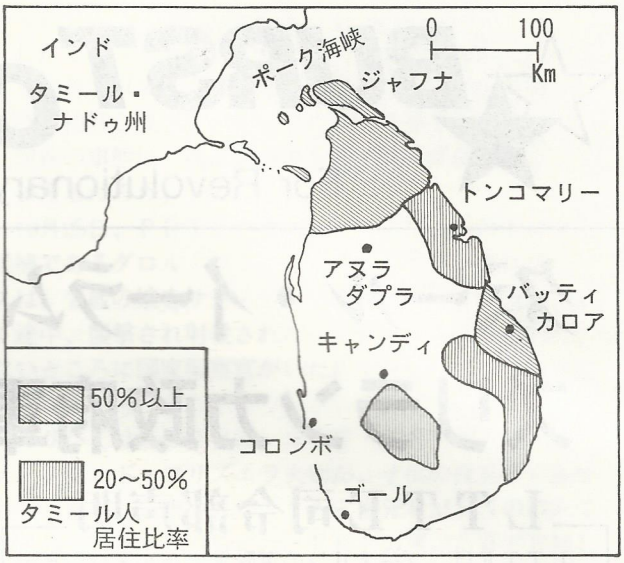
# ＬＴＴＥ解説

「タミール・イーラム解放の虎（ＬＴＴＥ）」は、70年代初頭に結成された。スリランカ北部、東部にタミール民族の独立国家を樹立することを目的とする。

スリランカは、多数派民族であるシンハリ人によって行政等が握られており、これと言語、文化を異にするタミール人は歴史的に抑圧されてきた。例えば、50年代にはシンハリ語の使用が強制され、大規模な衝突が起こった。こうした歴史を背景として、解放闘争が開始されたのである。

北部のジャフナ半島を拠点とするＬＴＴＥは、1975年にジャフナ市長を暗殺して以来活動を活発化させ、1983年には軍隊との衝突を契機として全島的な暴動を起こすまでに成長した。1986年までには、ジャフナ地域の事実上の支配を達成した。ＬＴＴＥのここ数年間の主な戦闘は以下の通りである。

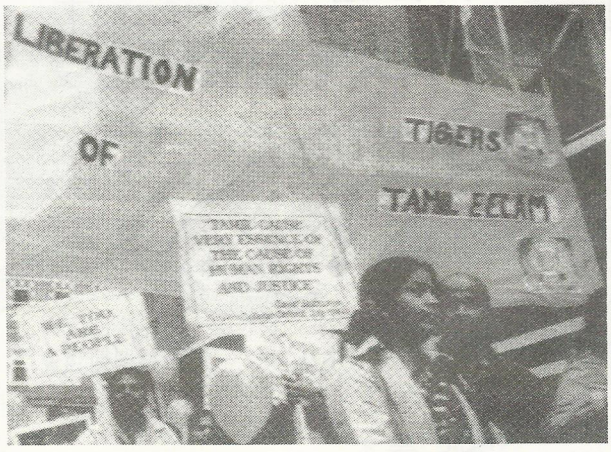
1986.5/ コロンボ空港でエアランカ航空を爆破
1986.7/ ３日間にわたってバスを連続爆破




1987.4/ 中央バスターミナルを爆破 400人死傷
1987.10/メンバー12人の逮捕（全て自殺）の報復としてスリランカ兵など 200人以上を殺害

1987年、スリランカ政府との協定に基づき（ＬＴＴＥはインドのタミールナドゥ州に基地を保持していた）インド政府は５万人もの軍隊をスリランカに派遣し、ジャフナ市を占領した。これによってＬＴＴＥは一時劣勢に陥ったが、インド軍に対しても果敢な攻撃を続けた。90年にインド軍が撤退して以降は、再度活動が活発化しており、軍事的力量はいささかも衰えてはいない。

スリランカ政府は、昨年末から和平を模索しており、ＬＴＴＥの要求する分離・独立は認めないものの一定の自治権の拡大を認めるとの提案がなされた。これは戦争を続ける一方、政治的解決の主導権を握ろうとする政府の二面作戦であった。そんな中、今年５月に、プレマダサ大統領が特攻爆弾攻撃によって暗殺された。ＬＴＴＥは、これへの関与を否定する声明を出したが、政府側はこれを契機として軍事行動を激化させ、さらにタミール人への無差別的な弾圧を開始し、多数が法的な手続きなしに逮捕、拘留されている。また、スリランカ軍は、ＬＴＴＥの支配下にあるジャフナ半島への攻勢を強めている。（編集部）




1983年のスリランカでのタミール人虐殺に抗議するデモ
（1993年６月、ロンドン）

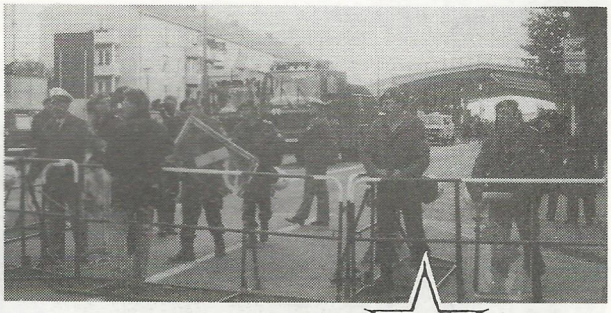
# ドイツ国境警備隊施設を爆破

## 革命細胞（ＲＺ）による 国境管理強化粉砕闘争

今回紹介するのは、ドイツの地下武装闘争グループ、「革命細胞（ＲＺ）」のドイツ東部国境警備の管理強化に対する攻撃についての声明である。10月４日未明、ドイツ／ポーランド国境の街、フランクフルトのオーデル河畔にある国境警備隊施設の敷地内の変圧器が爆破された。けが人はなかったが、国境警備隊施設への電力供給は一時ストップした。国境警備隊と刑事警察は、これを東部フランクフルト地域における「テロリスト」の攻撃としては初めてのもの、として発表している。この地域で「テロ活動」が強化されつつあるのを、連邦地方検事は甘く見ていたようである。

９月初旬、フランクフルト／オーデルでは難民法改悪に反対するデモが闘われ、約 700人（警察発表）が人種差別と排外主義に反対して決起した。デモはポーランドからの参加者とも合流し、戦闘的に貫徹された。当日、国境警備隊は放水車などを厳戒配置してドイツ／ポーランド国境にかかる橋を封鎖し、またボート数隻で川を越えて国境を実力突破しようとしたデモ参加者を逮捕している。

国境警備隊の重警備体制、国境の橋を封鎖している。



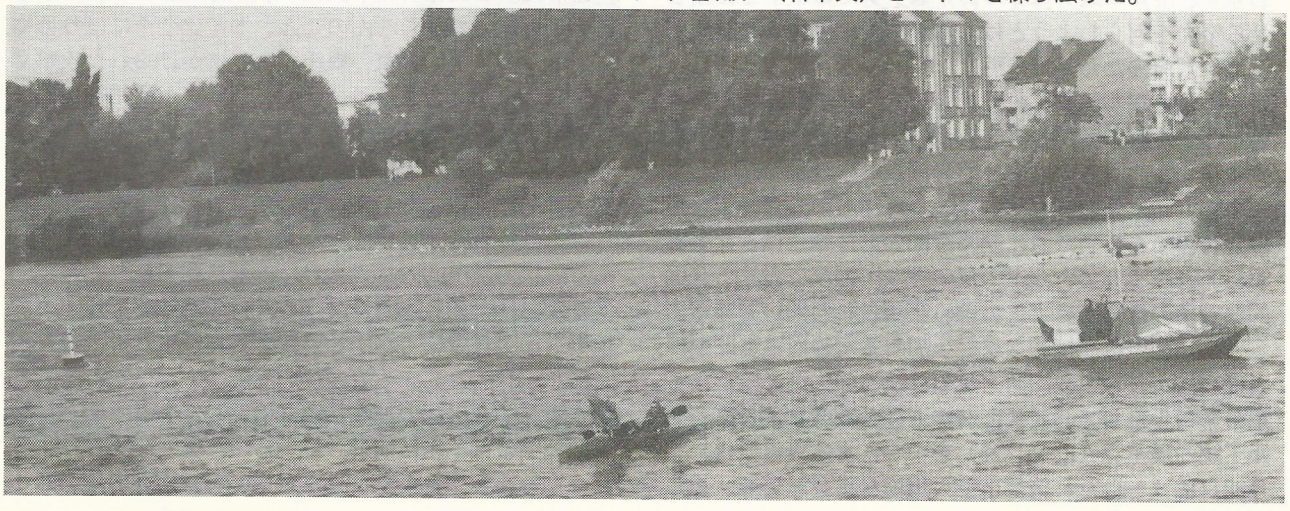
### ＲＺ声明

1993年７月１日に亡命申請権が廃止されて以来、難民の流入をＥＣ国境外で食い止めておくためのあらゆるもくろみがなされている。シェンゲン合意にもとづき、これを貫徹せんがための基準が設けられている。国境警備の東部地域での強化はその基準のひとつである。ポーランド政府による国境警備費用として１億２千万マルク（約84億円）がドイツ政府によって支払われた。さらにポーランド、チェコ両共和国とドイツの国境を監視するために、1500人のいわゆる警察補助員がドイツ国境警備隊に加えられ強化された。同時に、ＢＧＳは科学装備を整えた。移動レーダーと赤外線装置が、国境を越えて逃れてくる難民を発見するのに、効果的に活用されんとしている。国境を越えてくる人々を狩り込むため、ＢＧＳは毎晩ドイツの東部国境をパトロールしているのだ。

10月２日から３日にかけての深夜、我々はフランクフルト／オーデルの国境警備隊施設への電力供給システムを爆破し、またローテンブルク空港のＢＧＳ車両に火炎攻撃を敢行した。

▲国境管理強化に反対するデモ（93年９月）

▼デモ参加者は、カヌー（中央下）で国境実力突破を試み、警備艇（右中央）とバトルを繰り広げた。



# クルディスタンの独立を求めて
# ヨーロッパで2度目の一斉蜂起

93年５月29日、ボン（ドイツ）での12万人の大集会

11月４日、クルド労働者党（ＰＫＫ）の主導するクルディスタン解放闘争は、その大衆的広がりと民族の解放へ向けた固い決意を、本年６月のヨーロッパでの一斉蜂起に続く２度目の一斉蜂起によって全世界に示した。クルディスタン解放闘争の圧殺に全力をあげるトルコ政府は、その残忍な民族抹殺計画に対するクルド人民の抵抗の意志を明確に思い知らされることとなった。

北西クルディスタンのトルコからの分離・独立を求めるＰＫＫは、同地域のクルド人民の圧倒的な支持を背景として闘いを進めている。これに対してトルコ政府は、軍隊による攻撃を間断なく続けており、1984年から今日迄に１万人以上の人々が虐殺さた。

ＰＫＫは本年３月に、これ以上の無差別虐殺に一定歯止めをかけるべく、一方的な停戦を発表した。にもかかわらず、トルコ政府はクルディスタンでの戦争を終結させる努力を何らしようとはしなかった。平和的な解決がトルコ政府のかたくなな態度によって不可能であることが明らかとなり、ＰＫＫは６月に対トルコ全面戦争を宣言し、トルコの戦時経済を支える観光産業への打撃を与えるべく、旅行者の誘拐や観光施設への攻撃を開始した。そしてさらには、同月末のヨーロッパでの一斉蜂起を指導したのである。これに続く今回の一斉蜂起は、文字どおりＰＫＫそしてクルド人民のトルコ国家に対する全面的な戦争の遂行として、力強く実現された闘いである。

トルコ国家に直接的な攻撃を加えるためには、闘いの大衆的拡がりと、政治的力量の蓄積、強化が必要となる。その第一歩としてＰＫＫとクルド社会党（ＰＳＫ）、クルド統一民主党（H-ＰＤＫ）を中心とする諸組織は、５月29日にヨーロッパ諸都市で大規模な集会とデモ、そしてハンストを組織した。この共同の闘いは、６月に入ってさらに前進し、上旬にはトルコの革命組織とＰＫＫとの統一戦線の結成、さらに中旬には11のクルド諸組織による連合戦線の結成へと進んだ。本号では、これらの動きについての資料を採録している。また、９月４日にはフランクフルトのスタジアムで、10万人のクルド人そして友好団体を集めた国際クルディスタンフェスティバルが行われた。会場にはＰＫＫの主導するＥＲＮＫの旗が林立し、様々な民族行事が挙行された。このフェスティバルは、まさにＰＫＫの主導するクルディスタン解放闘争の国際的広がりと底力を示すものとなった。

今回の一斉蜂起に恐怖したドイツ政府は、トルコ政府への支援を更に強化せんと、11月26日、ＰＫＫとその関連の35組織を非合法化し、ドイツ国内での活動を即日禁止とした。これはクルド民族解放戦線（ＥＲＮＫ）やクルド・ハ通信はもちろんのこと、ドイツ全土にはりめぐらされたクルド人の草の根組織全てにかけられた攻撃であった。全国で、事務所、家屋、私書箱から銀行口座まで実に 100ヶ所以上が捜索を受けた。これに対しての反撃は既に開始されている。これにより、ドイツ政府は、国内に居住する45万のクルド人全てを敵にまわして闘わなければならなくなったのだ。本号では、非合法化された草の根組織が共同で発表した抗議声明を採録した。

また、クルド人民解放軍（ＡＲＧＫ）も、トルコ軍の執拗な掃討作戦にもかかわらず、若い戦士たちが続々と参加し、着実に拡大し続けている。

クルディスタンの独立と統一のために、クルディスタン解放闘争は不屈に前進しているのだ。

（編集部）

# 同時多発ゲリラで トルコ系施設を攻撃

**★ドイツ**

ドイツでは9都市でトルコ関連施設への攻撃が行われた。

〈ツェッペリンハイム〉トルコ系新聞『ヒュルリット』のヨーロッパ総局への攻撃では、局員にピストルを突きつけて、大鎚で電話交換器等を破壊した。

〈ヴィースバーデン〉トルコ・レストランに対し放火攻撃がなされ、1人が死亡、8人が負傷する。4人が逮捕される。旅行会社も攻撃。

〈シュツットガルト〉トルコ航空事務所とトルコ領事館に放火攻撃。

〈デュッセルドルフ〉トルコ系銀行と旅行会社を攻撃。

〈フランクフルト〉トルコ航空に対し攻撃。声明文が現場に置かれた。

〈ベルリン〉トルコ系放送会社に対して火炎ビン攻撃が行われ。建物の壁は黒焦げになった。

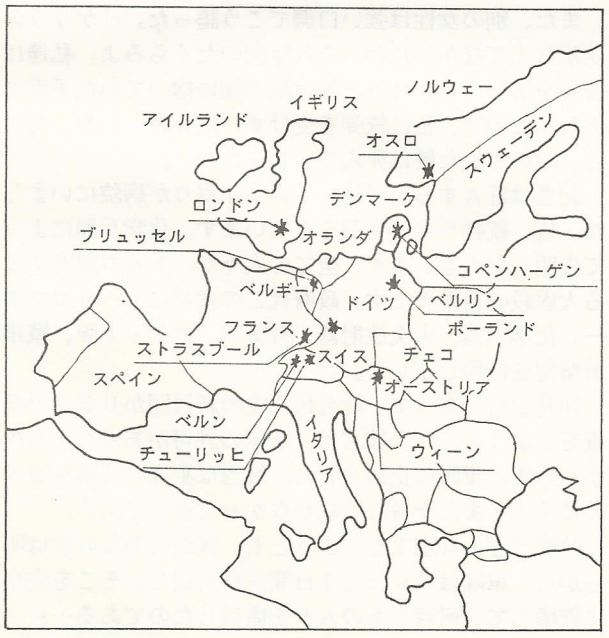
**★イギリス**

ロンドンでは、トルコ系銀行、トルコ大使館、トルコ航空事務所、トルコ系労働者クラブに対して火炎ビンによる攻撃がなされた。

ジラート銀行への攻撃では、火災が発生。5人の負傷者のうち3人は行員。隣接するイギリス・テレコムにも被害が及んだ。トルコ銀行には、10月29日にも火炎ビン攻撃がなされている。

**★スイス**

〈ベルン〉トルコ大使館を火炎ビンで攻撃。6月の一斉蜂起の際には、デモ隊に対してこの大使館から発砲があり一人が死亡している。これに関連してトルコとスイスは互いに大使を召還していた。




◀ 一斉蜂起のあった諸都市の地図

5月29日、ボン、12万人のデモ

〈チューリッヒ〉トルコ系銀行を投石攻撃。トルコ系旅行会社を7人で襲撃し、火炎ビンと投石で窓ガラスを破壊した。バーゼルのトルコ関連施設にも攻撃が行われた。

**★オーストリア**

ウィーンのトルコ系銀行へは3人が突入し、バットで窓ガラスや家具を徹底的に破壊した。

**★デンマーク**

コペンハーゲンのトルコ航空、旅行会社、トルコ商業会議所の3か所を攻撃。トルコ航空へは火炎ビンが投擲された。火炎ビンは発火しなかったが、ガソリンが室内に充満し業務をマヒさせた。

**★スウェーデン**

オスロでは、女性、子供を含む数十人がトルコ大使館へデモ。警察は、重警備弾圧体制を敷いた。

**★ベルギー**

ブリュッセルのＥＣ本部前で座り込み。

**★フランス**

ストラスブールのトルコ系施設を襲撃。

Attack Turkish targets across Europe

# リジェの大虐殺 〈リポート〉 トルコ国家の許されざる実像

トルコ国家は、またしても大虐殺をおこなった。それはリジェで起きた。

軍隊による攻撃は、10月21日に開始され、リジェの街は、戦車と機関銃、そして迫撃砲によって完全に破壊されてしまった。4日間にわたって続けられた攻撃の間、街へ入ることも近づくことさえも軍隊によって妨げられた。瓦礫の下に埋もれたまま、何百人もの人々が死亡し、多くの人々が傷を負った。

10月26日、街へ入ることを許された報道関係者は、完全に死に絶えた街を目の当たりにした。会社も店舗も、ありとあらゆる建物は形をとどめてはいなかったのだ。

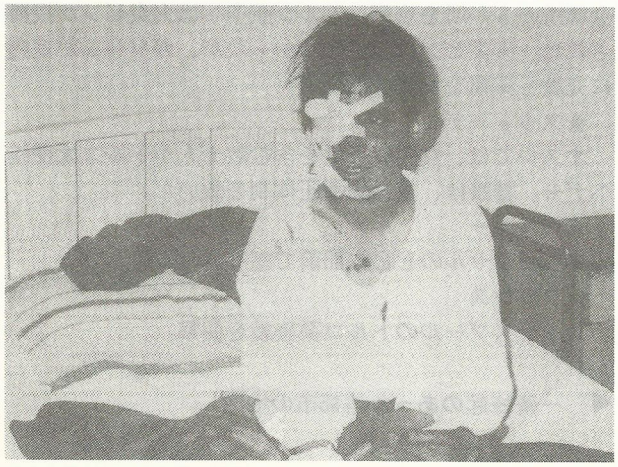
年々、クルド人民を虐殺することによって、トルコ国家はその威信を示そうとしている。そのために、シルナック、カルプ、ジズレ、ディヤディン、ジュクルカでも虐殺を行ったのだ。北西クルディスタン（トルコ東南部）を事実上の解放区としたＰＫＫが、非クルドの報道機関や政党を禁止するのに成功して以来、トルコ国家は、この地における威信を喪失してしまった。（これは、メディアが国家の統制下に置かれている情況にあっては、様々な議論において論議されねばならない問題である）。そうした状況の下、トルコ国家はリジェを破壊したのである。

軍隊は、虐殺の初日にはＰＫＫとの交戦があったと発表している。翌日（10月22日）、この地域にやってこようとしたバティヤール・アイディーン将軍が殺害された。軍隊はこれを口実に、リジェへの暴虐を強めたのである。

もちろん、軍隊は最初に、将軍はＰＫＫによって殺されたと発表した。次の日の声明では、全クルディスタンとリジェは軍のコントロール下にあり、「流血には報復がなされる」とする別の声明を発表している。これが、大虐殺の前兆だったのである。

ＰＫＫは、将軍を殺害しておらず、リジェでのトルコ軍との交戦はなかったとの声明を出している。

軍隊による攻撃の初日、街にいなかった人々は、リジェ市内に入ろうとした。もちろん、ジャーナリストらも閉ざされた街に入ることを試みた。しかし皆、街の手前で軍隊によってとめられた。その時、何がリジェで起きているのか、容易に想像できた。あたり一面に煙が立ち込めるのが見え、絶え間ない爆発音が聞こえたのである。



第一報は、リジェの負傷者が運びこまれたディヤバキールの病院からもたらされた。

負傷したある女性は言う。「攻撃は朝の9時にはじまったわ。最初に銃声が聞こえ、少し後に戦車が発砲したの。ヘリコプターが私の家にロケット弾を撃ち込んで、私は負傷したのよ。ゲリラとトルコ軍との間の戦闘はなかったわ。これはクルド人に対する一方的な虐殺よ」。

リジェを逃れてきた目撃者は語る。「政府は『リジェの政府施設がクルド分離主義者によって破壊された』といっている。そりゃ、嘘だ。わしは、街の破壊が開始される前にビルがあったのを見たんだ。政府のビルは何ともなかったよ。兵隊は、あちこち捜し回り、持てるだけの金目のものをあらいざらい持ち出したんだ。金やカネ全てだ。その後で自分たちで火をつけたんだ」。

別の目撃者は言う。彼は教師である。「兵隊達が、30人以上の人たちをこっぴどく殴っているのを見ました。兵隊達は口々に『お前達は将軍を殺した。同じように殺してやる』と言っていました」。街に入ることが出来たある市民は言っていた。「大通りで、見えただけでも4つの死体があるのを見た。身を隠していた女性を見つけたら、彼女は兵隊達が校庭で27人を殺したと教えてくれたよ。学校中いたるところ死体で一杯だった」。

病院にたどりつくことができた、ある負傷した女性は、こう言った。「私の家には10人がいたの。私と幼い娘だけが生き残ったの。軍隊は、家から通りに出てくるようマイクで呼びかけたわ。人々が出てくると軍隊は皆を機関銃で撃ち殺し、その後、火炎放射器で焼いたのよ。わたしの子供たちはそうやって焼かれてしまったわ！」

また、別の女性は強い口調でこう語った。「ゲリラの攻撃なんてなかったわ。これは国のたくらみよ。私達は銃弾を浴びたわ。だけど弾は私の腕に抱いていた子供にあたったので、私は銃弾を受けず、生き残ったわ。だけど、抱いていた娘は死んでしまったわ」。

記者は証言する。「幼い子供や年寄りが病院にいました。皆、銃弾や火で怪我をしています。化学兵器によって失明した人もいます。全ての人々が、トルコ政府による大虐殺の目撃者です。政府はこの虐殺に、ヘリコプター、化学兵器、火炎放射器、機関銃、ロケット弾、戦車、迫撃砲を使用しました」。

10月23日になって、社会民主党の議員団がリジェの調査をしようとした。彼らは、閣僚の許可があったにもかかわらず、軍隊に止められた。残忍な犯罪の証拠を隠すのに？！？まだ十分な時間がなかったからである。

政府がどんな細工をしようとも、誰が有罪なのかは明らかだ。軍隊はリジェを4日間隔離封鎖し、そこを完全に破壊して、何百人もの人々を虐殺したのである……。

# 連携強めるクルド諸組織
# ヨーロッパ各地で共同行動

1993年６月18から20日にわたって、クルド統一民主党（Hevgirtin-ＰＤＫ）、クルド労働者党（ＰＫＫ）、クルド社会党（ＰＳＫ）を中心とする11のクルド諸組織が参加した歴史的な会議がおこなわれ、北西クルディスタン（トルコ領内）におけるクルド諸組織の連合戦線の設立を決定した。うち、８つの組織は５月29日にヨーロッパの諸都市でデモを組織し、ロンドンにおいても闘われた。以下の文章は、この日、ロンドンにおいて諸組織を代表しておこなわれたスピーチの内容である。

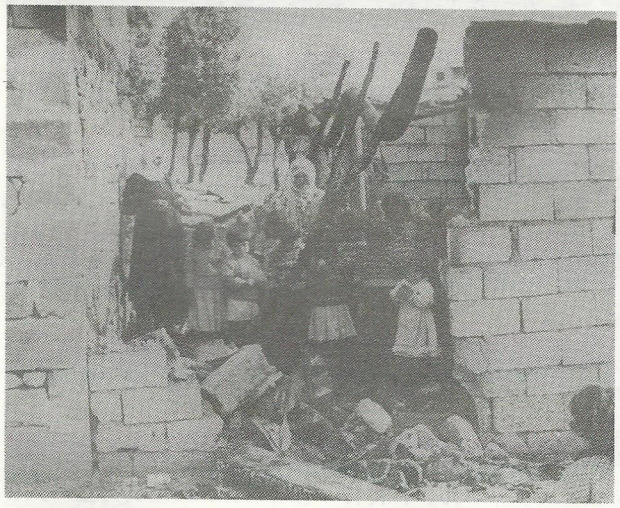
## 5.29ロンドン・アピール

トルコ、クルド両人民の関係は、現代における最も複雑なもののひとつである。トルコとクルドの民族は、中東の人々の運命にとって重要な役割を担っていると言えよう。今日の対立情況はこれまでの複雑な、歴史的かつ政治的事象に起因している。

クルド解放闘争は、数十年にわたって、クルド人民を組織し、クルディスタンの独立のうちに自由をもたらすことを希求してきた。我々は常に、平和的方法の追求を試み、政治的な解決を探し求めてきた。クルドの存在そのものを否定し、絶滅せんとするトルコの政策下にあって、基本的な民主主義的諸権利と自由を獲得するためのクルド解放闘争の手段として、我々は武器をとるという選択しか残されていなかった。

「クルドの文化的諸権利は回復されるだろう」とする公約をおこなった前首相デミレル（現「大統領」）の連立政権をはじめとして、これまでトルコ政府は、各政権一貫して軍政をクルドに強要してきた。

最も基本的な人間的諸権利が否定されてしまっているクルディスタンにおいて、とりわけ1990年秋以降警察特殊部隊とトルコ秘密警察（ＭＩＴ）から編成された「対



トルコ軍の攻撃で破壊されたクルディスタンの村

93年５月29日、トラファルガー広場（ロンドン）でのクルド諸組織共同集会

ゲリラ・殺戮部隊」が、わがもの顔で活動している。

1992年の１年間だけでも、多くの残虐行為がなされている。２万人以上が逮捕され、国家による殺人攻撃で３85人もが虐殺された。 320の村が無人と化し、破壊された。37人の著名な政治家と14人のジャーナリストが殺された。続けざまに５つの街が数日にわたって空爆を受けている。打ち続く国家の圧迫と街や村の破壊の末、４万人もの人々が家を捨て郷土から離散せざるをえない状況に追い込まれたのだ。

クルド人民に対する攻撃は、トルコ西部へも拡大し、リゾート地であるアランヤ、フェトヒイエ、イズミールで、トルコのメディアが先導し、かつトルコ国家が補強する憎悪が、まさにクルド人民に直接的に仕向けられているのだ。

クルド問題の平和的な政治的解決のための環境の創出を望むクルド、トルコ、あるいは世界中の人々の呼びかけに応え、ＰＫＫの総書記アブドッラー・オジャランは1993年３月17日の記者会見において一方的な停戦を宣言した。これは４月16日の２回目の記者会見において条件付きでさらに延長されている。

この歴史的なステップは、クルド問題の平和的かつ民主的解決を呼びかけるＰＫＫとクルド社会党（ＰＳＫ）そしてクルド統一民主党（Ｈ－ＰＤＫ）が交わした共同議定書にもとづくものである。

この第一歩によって、クルディスタンにおけるほとんどすべての政治党派、諸組織が民族戦線の設立に向けて動きだしている。本日のヨーロッパ諸都市におけるデモは、８つのクルド組織の協力の結果である。クルド諸党派からの提起に対し、トルコ政府が積極的かつ肯定的回答をすることを要求するものであるが、今までのところトルコ政府からは否定的な回答しか得られていない。

ＰＫＫによる一方的な停戦の宣言にもかかわらずトルコ軍は軍事作戦を継続している。３月20日以来、少なくとも 128人以上の人々がクルド地方で虐殺された。保安部隊によって連れ去られたほとんどの人々は「行方不明」とされたままである。

（８ページへつづく）

Speaking at demonstration in London 29, May

（7ページからつづく）

村の警備隊が、村を攻撃して居住者を殺し、家や財産を燃やし尽くした。この2カ月間に6つの村が軍部隊によって強制的に立ち退かされている。この間、少なくとも2千人が逮捕されている。

クルド語の書籍、言葉、同様にクルド文化は今なお禁止されている。クルドの言論は、衰えることのない権力と非道によって迫害され、ほとんどのクルドの出版物は押収されている。文化、研究、若者、女性に関わる民主的かつ合法的な諸組織は、今もなお迫害され活動禁止状態にある。

もしトルコ政府が現在の政策を放棄しないのならば、…もし、平和的対話を始めることを拒絶し、軍事的暴力政策に固執するのならば、さらなる流血、国土と資源の破壊の責任はすべてトルコ政府に帰するだろう。

我々は西側諸国の政府、とりわけイギリス政府に対し、トルコ領クルド問題に関しての目下の沈黙をやめ、トルコへの政治的、軍事的、経済的援助を中止するよう呼びかけ、クルド人民虐殺に手をくだす者との同盟関係を終わらせるよう訴える。

再度、平和を愛する人々、人道主義者、民主的諸党派、組織、諸個人に、とりわけイギリス政府に我々は呼びかける。クルド問題の正しく平和的な解決のための我々の要求の擁護を。そして我々が平和を達成することができるよう、トルコが対話を始めることを強く要望する。

国際連帯万歳！

民族の統一のために団結しよう！

# 革命的民主勢力の統一

ＥＲＮＫの呼びかけによって、6月6日、トルコの8つの左翼組織は、革命的民主統一戦線を結成した。参加したのは、クルド労働者党（ＰＫＫ）、トルコ共産党マルクス・レーニン主義派（ＴＫＰ／ＭＬ）、トルコ共産党火花派（ＴＫＰ－Ｋ）、マルクス・レーニン主義武装宣伝隊（ＭＬＳＰＢ）、トルコ共産主義解放機構（ＴＫＫＯ）、トルコ労働者共産党（ＴＫＥＰ）、トルコ革命党（ＴＤＰ）、10月組織（Ｅｋｉｍ）、である。他の党派も参加する予定である。

この統一戦線は、トルコの軍事的支配（すなわち、クルディスタンにおける戦争）とトルコにおける革命勢力への「即決裁判」による処刑攻撃に対して、3か月間のキャンペーンを組織することを決定した。

1993年9月4日、フランクフルトでの国際クルディスタン・フェスティバル。ＰＫＫ－ＥＲＮＫの政治的力量の大きさを示すものとなった。皮肉なことにドイツのコール首相、ワイツゼッカー大統領からもメッセージが寄せられた！

# 在ドイツ、クルド諸組織共同声明
## ドイツ政府の非合法化攻撃には屈しない

トルコがドイツ製武器で、クルド民族殺戮を続けている。これはいますぐ、なんとしてでも阻止されなければならない。

クルド人を長きにわたって、犯罪者扱いし、悪らつなイメージをふりまいてきたトルコ、ドイツの「協力関係」は、ついに合法的なクルド人民組織に対して「活動禁止措置」を発動するまでに至った。トルコの意向をうけてなされたこの決定は、極めて政治的なものであり、何らの合法性すら持ち合わせていない。具体的な根拠のある決定というのであれば、公の場ではっきりとそれが示されるべきであり、通常の、かつ、合法的な手続きをもってなされるべきはずのものであろう。我々はこれら一連の不当な措置に断固として立ち向かうものである。これまでのところ、今にいたるまで、我々の組織に対しては何ら裁判は開かれたことはない。

この信じがたい非民主的決定は、トルコ首相チルレルの先日のドイツ訪問中になされたものである。トルコが戒厳令下に適用したのと同様の悪法である。我々はドイツ、そしてあらゆる地域において国際的に組織する我々の権利を断固として守り抜く。我々は何千ものクルド人民の支援を受けているのだ。人民は自らのゴールに向けて闘い抜いており、何らかの党に束縛されているわけではない。全てのクルド人民は、トルコによる民族絶滅攻撃と戦っているのだ。ドイツ政府が、我々諸組織の「活動禁止措置」をもって、ドイツに暮らす何百、何千ものクルド人民の我々への支援と共感を阻害することが出来ると思っているのなら、それは大きな間違いである

この問題は、対話という道によって解決されるべきであり、クルド諸組織の「活動禁止措置」などによって解決することなど出来ないのだ。もし、このような措置が解決策となりうるのなら、トルコ国家がとうの昔に問題を解決していたであろう。

我々諸組織への「活動禁止措置」は、醸成されつあるトルコとドイツの協力関係の結果としてもたらされた。トルコ権力はこの措置を歓迎し、通常の放送番組を中断して、このニュースを放送した。ドイツは、トルコによるクルド抹殺攻撃の「共犯者」となるのを望んでいるのか否か、クルド人民に対してはっきりと示さなければならない。トルコは1980年以来、ドイツからの兵器購入の費用に何万ドルがトルコから流れたことだろうか。870ものクルドの村々を灰塵に帰した責任は誰にあるのか？ドイツのテレビ映像でも見られるが、クルディスタンで攻撃を加えるのに使われるドイツ戦車を送り込んだのは誰なのか？歴史的、ドイツ政府はトルコに武器を送り込むことで、トルコによるアルメニア人虐殺の共犯者であり続けた。次は、クルド人民虐殺を支援しようというのか？

我々クルド民族並びにクルド諸組織は、和平と平和的解決という立場に立つ。だが、戦車や様々な形での軍事的援助がヨーロッパから、とりわけドイツから送り込まれている。しかしながら、ドイツは虐殺に直面するクルド民族の沈黙を依然として望んでいる。

本声明に共同署名する我々諸組織と、また同様に我々を支持する20万ものクルド人民は、この情況を認めてはならず、真に民主的な場が創られねばならないと願うものである。

クルディスタン委員会
フェイカ・クルディスタン
クルディスタン・センター（ボン）
文化センター（ベルリン）
労働者組合（ブレーメン）
クルド人民支援文化組織（フランクフルト）
クルド文化協会（ニュルンベルク）
文化労働者協会（コブレンツ）
メデャ文化協会（ハーゲン）
クルド文化協会（マンハイム）
クルディスタン・センター（ビエレフェルト）
クルド人民文化協会（ドゥイスベルク）
クルド文化協会（ツェレ）
クルド連帯センター（シュツットガルト）
クルド文化協会（ハンブルグ）
クルド労働者協会（ハノーバー）
クルド労働者組合（ケルン）
クルド文化労働者組合（ザールブリュッケン）
クルド文化協会（レンズベルグ）
クルド女性センター（レバークーゼン）
クルド文化センター（カッセル）
クルド協会（ミュンヘン）
クルド文化センター（インゴシュタット）
クルド文化情報センター（フライブルグ）
クルド文化連帯センター（ドルトムント）

1993.11.26

◀ ハンストでトルコ政府に抗議するクルドの女性グループ

〈エルサルバドル〉

# FMLNに対する暗殺攻撃が頻発

エルサルバドルでは、政治的な暴力が再び台頭している。10月下旬から11月上旬にかけて、7件の襲撃事件がおこり8人のFMLNメンバーが被害にあった。その内、2人の軍司令官を含む6人が死亡している。

FMLN（ファラブンド・マルチ民族解放戦線）は、1980年に5つの革命組織の連合によって形成された。構成組織は、人民革命軍（ERP）、人民解放戦線（FPL）、民族抵抗軍（FARN）、中米労働者革命党（PRTC）、エルサルバドル解放軍（FAL）である。解放区を形成し、2度にわたる一斉蜂起で政府軍を追い詰めていた。

しかし、ニカラグアの革命政権が「民主的選挙」によって倒れて以来、エルサルバドルでは、国家とFMLNの間で和解が成立し、ゲリラは武器を置き公然化した。

現在の事態は、武装闘争を放棄した『高価な代償』だと言えるだろう。

10月25日、PRTCの軍司令官でFMLNの下院議員候補であるダロル・フランシスコ・ブリス・カステラノスは、2歳の娘をサン・サルバドルの保育所へ連れて行く途中、襲撃され射殺された。この時、100mも離れていないところに国家警察官がいたにもかかわらず、暗殺者達は無事に逃亡した。

ガザパではその2日後、ユリア・ビクトリア・オレラナ、メダルド・ブリズエラ夫婦が、子供の授乳中に襲撃され、婦人が殺害された。2人とも元FMLNの戦闘員であった。また、31日には、ERPの軍司令官でFMLNの国家運輸委員会代表であるヘレノ・カストロ・ゲバラが、サン・サルバドルの東65kmの地点で車を運転中、射殺された。

11月3日、ERPメンバーで教師のガブリエル・クインタニアは、学校で執務中に襲われた。腹部、胸、腕の4ヵ所に銃撃を受けたが、一命はとりとめた。8日には、PRTCの指導者のボディーガードとFMLNの元戦闘員の死体が、サン・サルバドルのソヤパンゴで発見された。2人は、頭部を撃ち抜かれていた。国家警察官らが彼らを拉致したのを見たという証言がある。

ERPの司令官ネストル・エミリオ・バラオナは、11月8日、サン・ビセンテに近いアジアン・ハイウェー上で襲われたが、危うく難を逃れた。また、FPLの元戦闘員ヨス・ミランダは11月12日、死体で発見された。

# ベルリン・オリンピック誘致に反対し　同時爆破

オーストラリアのシドニーが、2000年のオリンピック開催地に選ばれたことで、長年にわたるベルリン・オリンピック反対闘争は終点を迎えた。そのベルリンのオリンピック反対闘争は、ちょうどIOCによる開催地決定を間近にひかえた、9月15日の4ヵ所の爆破によって頂点に達したのである。

ダイムラー・ベンツ社の事務所とヘルティエ倉庫、そしてベルリナー銀行の2つの支店で爆発が起こった。これらの企業は、オリンピックのベルリン誘致のため積極的に資金提供していたのだ。反オリンピック委員会のスポークスマンは、「さらなる攻撃が起こるかもしれない。物質的な損害があったとはいっても、これはベルリンが開催地となるのを阻止するための『正当な手段』なのだ」と述べたのであった。ベルリンでのオリンピック阻止闘争は、最近闘われた2波にわたる大衆デモだけでも、のべ1万人以上動員し、またゲリラ的抵抗運動も成功していた。

一連の闘いは、単にベルリン・オリンピックに反対するだけではなくオリンピック誘致によってもたらされるさらなる資本のベルリン流入、人民抑圧都市化への阻止闘争としても取り組まれた。

周知のとおり、ドイツはヒトラーの時代の1936年にベルリン・オリンピックを開催している。現IOC会長のサマランチは、スペインのフランコ・ファシスト政権内閣で大臣を務めていた人物である。ドイツにおけるファシズムの頭目である首相コールは熱心にオリンピックの誘致に動いていた。まさにファシズムとナチズムに貫かれたオリンピックの夢と言うわけだろう。

IOCによる開催地決定の第1次投票で、ベルリンは90票の内8票しか獲得できなかった。これは、戦闘的左翼勢力が連続的に取り組んだラジカルな抵抗運動が、ドイツ政府、ベルリン市の力をはるかにうわまわるものであったことの証左であろう。

---

★定期購読料金値上げのお知らせ★

本紙は、平均8ページの分量を想定して、定期購読料を10号分2500円として来ました。しかし、昨年より1号あたりのページ数が増加しています。また、94年からは郵便料金が値上げされます。これらの理由により1月15日から定期購読料を10号分3500円とさせて頂きます。


世界の革命運動の情報紙

BURST CITY
For Revolutionary Resistance

★発行　A. R. P
★連絡先　〒606 京都市左京郵便局私書箱57号
ARP
★FAX　075－781－1253
★定期購読料　10号分　3500円
★郵便振替口座
大阪2－252923　ARP

本号 250円